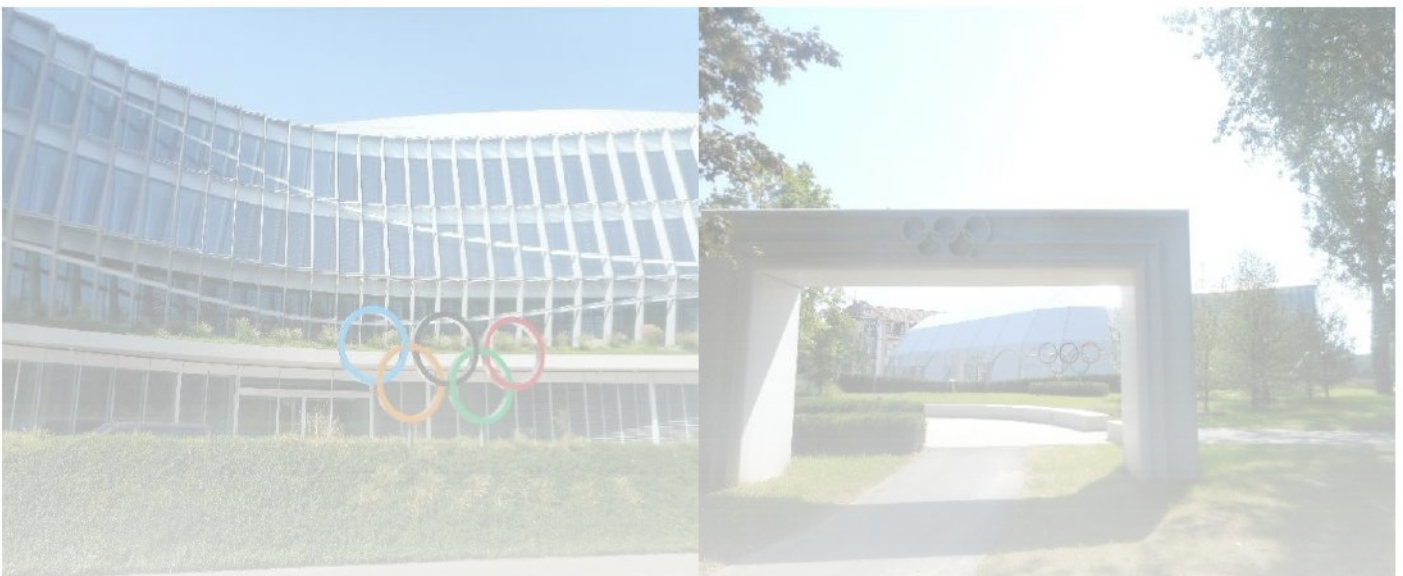




6月23日(日曜日)、落成式の様子がテレビで放送された。 IOCのトーマス・バッハ会長(中央左) = IOC 提供

IOC 国際オリンピック委員会は、6月23日、スイスのクーベルタン男爵が近代オリンピックを創始した「オリンピック・デー」に
 今まで4カ所で仕事をしてきたスタッフを一つの屋根の下にまとめるなどを理由に、約1億4500万スイスフラン(約157億円)
 をかけて改修した「オリンピック・ハウス」の落成式を行いました。一般的な商業ビルに比べてエネルギー使用量は35%減、水の
 使用量は60%減に抑えるなど、持続可能性に配慮した建築や設備の高性能を評価したLEED認証システム「LEED」から最高のプラ
 チナ認証を得るなど、国内外から高い評価を受けています。この日は「オリンピック・デー」。近代五輪の父と呼ばれるフラ
 ンスのクーベルタン男爵が、オリンピック競技場の復興を提唱し、IOCが誕生して1894年から125周年となった日に合わせ
 て披露しました。世界中から関係者が駆けつけ、日本からは東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗会長も
 出席されました。バッハ会長は演説で「世界で最も持続可能性に配慮した建物と認められた。(新本部は)クーベルタン氏が掲げ
 た(IOCの)使命や価値観を反映している。彼の思いを未来に引き継ぐことを誇りに思う」とメッセージされました。



「オリンピック・ハウス」は、レマン湖畔・ヴィディ地区にある市有地に建っています。2万2千平方メートルのガラス・ス
 テール製の現代的な建物で、500人のスタッフを収容するキャパシティを持っています。同じ敷地内には旧本部の「シャト
 ー」を残しており、ここ最上階に「歴代の会長が使用されているスイートルーム」があり、トーマス・バッハ会長もここを
 仕事場にされています。隣に新設されたオリンピック・ハウスとは隣接していて、ガラス張りの渡り廊下で繋がっています。

IOCのトーマス・バッハ会長は式典で「まさにこの日、ピエール・ド・クーベルタンが国際オリンピック委員会を設立し、オリンピックを復興させた」と100年余にわたる歴史に触れ、「クーベルタンは（五輪を）国家と人々の平和を促進する方法だと考えていた」などと語られました。落成式にはスイスのウエリ・マウラー連邦大統領、IOCのメンバー、各国際機関の関係者、206カ国のそれぞれIOC代表が出席しました。

オリンピック・ハウスの設計はデンマークの建築事務所「3XN」が手掛けました。アゴラ（集会所）のようなエントランスホール、スポーツイベントをテレビ観戦できるレストランとカフェ、5つの大会議室、オフィス、スポーツセンターを備えています。また五輪の形に配置したらせん階段もあります。

IOCは「世界で最も持続可能な建物 (SDGs に貢献)」と自負しています。実際、この建物の持続可能性は高く評価され、スイス国内外で数々の賞を受賞しています。屋上にはソーラーパネルが敷かれ、レマン湖からポンプで引いているのです。

IOCは1915年4月10日、ピエール・ド・クーベルタン男爵がローザンヌで設立。以来、オリンピックは運営費数十億ドル(邦貨：数千億円)規模の大イベントに発展してきました。ローザンヌ市とIOCは、2015年までのリース契約を新しく結ぶことで合意しました。またローザンヌは、来年の東京オリンピックの半年前に開催され、2020年夏季ユースオリンピックの開催地でもあります。ですので、街中には2020 Youth Olympicの看板もちらちらと見受けられました。

IOCやスイス拠点の国際スポーツ連盟が経済効果は約1億7千万フラン(邦貨：約1,231億円)、ローザンヌ市だけで2億5千万フラン(邦貨：約288億円)に上るとも分かっています。

前号でも特集しましたように、IOCは落成式が開催された翌日24日にIOC総会を閉じ、2026年冬季五輪の開催地にイタリア・ミラノとコルティナダンペッツォを選びました。地味なイメージのイタリア、州の「シオン」も当初は候補に挙がっていましたが、住民投票で賛成が得られず、落選してしまいました。



何度も通った旧 IOC 本部に比べますと、およそ10倍以上の大きなスケールで、ここ同様にレマン湖を眼下に臨む故サマランチ会長が建てられた Olympic Museum (オリンピック博物館)と同じく、エントランスには螺旋階段が附いていました。セキュリティも厳しく、エントランスでは自動センサーによる持ち物チェックも同時に行われています。故サマランチ会長の私設秘書「アニー・ベネッセ」が新しい広報スタッフとして、特に若手社員への教育者として今年元氣に活躍されています。